

第7章 因果関係を表す複文における構文モデル

本研究では、これまでの5章の中の第2章と第3章において、因果関係を表す複文における日中両言語の接続表現の使用と因果関係の度合いとの関連性、接続表現の機能および使用範囲について広範囲に検討を行った。そして、第4章～第6章において、因果関係を表す複文における原因節の焦点化、接続表現の使用と主語、述語動詞および時間表現との関連性について論じてきた。本章は、本研究で行う対照研究の最終章として、両言語の因果関係を表す複文における構文モデルについて全面的に眺め、因果関係を表す複文の展開方法や接続表現の機能についてさらに極めることを目的とする。

因果関係を表す複文の基本的な構造は、順行型の「原因→結果 (P→Q)」構文と、逆行型の「結果←原因 (Q←P)」構文の二種類あるのが両言語の共通点であるが、これらの基本的な構造から発展し、文を構成する場合は、両言語にずれが生じる場合がある。

日本語は、節と節をつないでいくうえで、接続表現などの文成分の助けを借りなければならぬため、構文上は形態を重視し様々な制約を受けやすい。したがって、複文の成立は、「原因→結果」、または「結果←原因」といった前件と後件の関係に拘らなければならず、バラエティに富んだ構文の成り立ちは許されないと考えられる。

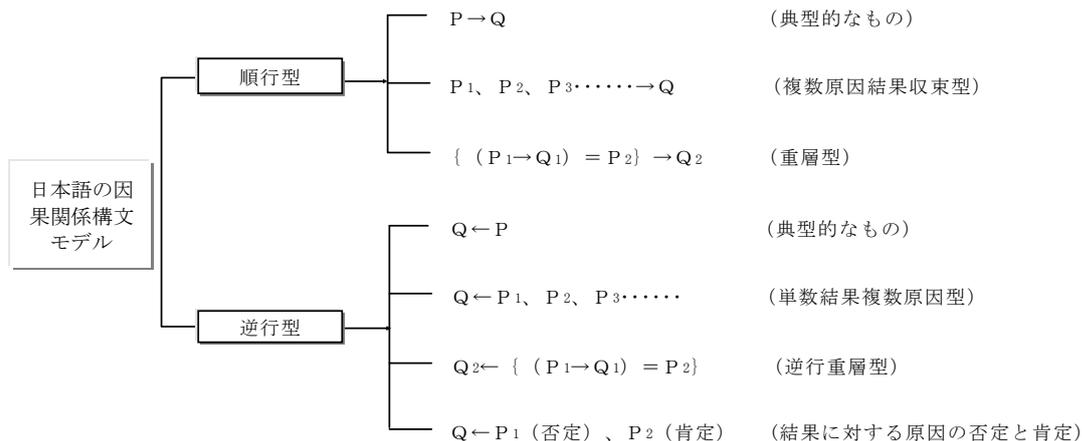
一方、中国語は複文の成立は接続表現に左右されず、構文制約を受けにくく、原因節と結果節の位置変換が自由であるため、因果関係を表す複文の構文モデルは「原因→結果」、または「結果←原因」といった典型的な構文形式だけではなく、「原因→結果←原因」のような変形型の存在も認められる。

また、日本語では、原因がいくつかの節によって形成される場合は、因果関係を表す表現の機能の制約を受けやすいが、中国語ではそういった制約より、接続表現の位置に拘っているようである。いずれにせよ、構文上では、両言語は重なっている部分が多いが、ずれが生じる場合も極めて多いと推測される。

本章では、まず、両言語の因果関係を表す複文の構文モデルについてそれぞれ分類し、構文の特徴について検討した上で、そうなる理由についても探求する。また、分析結果によって、両言語の因果関係を表す複文の構文上の異同を明確にする。最終的には、単なる両言語の因果関係を表す複文における構文の種類の違いを明らかにするだけでなく、各構文モデルの機能的な一面での相違点と類似点の洗い出しも行ってみたい。

7.1 日本語の構文モデル¹⁾

日本語の因果関係を表す複文における表現類型モデルは大きく順行型と逆行型の2種類に分けられる。原因節の構成に着目すると、それらはさらに以下のように細分化できる。



【図15】日本語の因果関係を表す複文における構文モデル

7.1.1 順行型構文モデル

順行型モデルには、典型的な構文の「 $P \rightarrow Q$ 」型と、その拡張形式の複数原因結果収束型「 $P_1, P_2, P_3 \dots \rightarrow Q$ 」、原因節交差重層型「 $\{(P_1 \rightarrow Q_1) = P_2\} \rightarrow Q_2$ 」の3種類に分けられる。ここでは、实例を通して、まず「 $P \rightarrow Q$ 」型とその拡張形式の「 $P_1, P_2, P_3 \dots \rightarrow Q$ 」型について検討してみる。

7.1.1.1 「 $P \rightarrow Q$ 」型と「 $P_1, P_2 \dots \rightarrow Q$ 」型

「 $P \rightarrow Q$ 」型の表現形式には、「 P から Q 」「 P ので Q 」「 P ため Q 」などがある。「 $P_1, P_2, P_3 \dots \rightarrow Q$ 」型は、複数の原因を挙げて、ひとつの結果を導くものであり、日本語の中では、原因・理由を表す「し」節²⁾または「て」節と「から／ので」節との併用によって、表現する場合が多い。原因節の順序は因果関係の度合いの制約を受け、「弱 \Rightarrow 強」ないし「弱 \Rightarrow 弱」といった順序で並べていく。ここで言う因果関係の度合いの強弱は、原因・理由を明示的に述べる接続表現を用いた節を「強」と考え、原因・理由を明示的に

述べる機能を持たない接続表現を使用した節を「弱」と考えるという意味である。主たる表現形式としては、「P₁し、P₂から→Q」、「P₁し、P₂ので→Q」、「P₁て、P₂から→Q」、「P₁て、P₂ので→Q」、「P₁て、P₂て→Q」などがある。

- (1) わたしは落ち着いたので、そう言ってわらった。 『挽』
- (2) 砂の表面は、比熱が高いために、つねに乾燥しているが、 『飼』
- (3) 喜助の家は藪に囲まれていたからうす暗い。陰気だ。 『越』
- (4) 僕もとくにヌード写真を貼りたかったわけでもなかったので、べつに文句は言わなかった。 『ノル』
- (5) これは八千代からの依頼であるし、自動車でひっかけたという縁故もあるので、何とかしてやらねばならぬ。 『あ』
- (6) 大小の壮行会が毎晩のように行われたし、三人ともそれぞれ勤めを持っている身なので、会社の仕事も一応格好をつけておかなければならなかった。 『あ』
- (7) 矢須子さんは疲れているようだし、昼飯を知らせるベルが鳴ったので、それを汐に帰ることにする。 『黒』
- (9) 大学教授も銀行家に用事があるらしかったし、銀行家の方も大学教授に頼みたい事があったらしかったので、二人を自分が仲に立って引き合せてやったのである。 『あ』
- (10) 陽にあぶられ、雨に浸されて、思う存分に変形した、それら物体の累積を、叙述する筆を私は持たない。 『野』
- (11) 船頭に聞くとこの小魚は骨が多くて、まずくて、とても食えないんだそうだ。 『坊』
- (12) あまりうれしくて、ありがたくて、涙ぐんでしまった。 『斜』

(1)～(4)はもっとも典型的な構文モデルの「P→Q」型である。それぞれひとつの原因より結果を導くという構文になっており、原因節と結果節の関係は直接的な論理関係である。(5)～(12)は「P₁、P₂→Q」型であり、何れも複数の原因節よりひとつの結果を導くという構文になっている。(5)～(9)は「P₁し、P₂ので→Q」構文であり、原因節は因果関係を明示させない節から明示させる節へといった順序になっている。原因・理由を表す「し」節は「から・ので」節より緩やかな因果関係を表しており、ほかにも理由もあるという意味合いも含まれているので、複数の原因によって、ひとつの結果を導く構文には、多く用いられる。「P₁し、P₂ので→Q」文の原因節は何れも結果節と直接的な論理関係

を有している。つまり、「P₁ し→Q」構文と「P₂ ので→Q構文」の何れも成立するということである。たとえば、例(6)の場合は、原因節の①と②を分散すれば、それぞれ結果節と組み合わせることができる。

(6') 大学教授も銀行家に用事があるらしかった \square 、二人を自分が仲に立って引き合せてやったのである。

(6'') 銀行家の方も大学の教授に頼みたい事があつたらしかつた \square ので、二人を自分が仲に立って引き合せてやったのである。

(6') (6'') の二つの文はいずれも先行節と後続節の間に論理関係が読み取れる。(6') は先行節の「大学教授も銀行家に用事があるらしかった」という理由によって、「二人を自分が仲に立って引き合せてやった」という結果が導き出されることが論理的に成立できると言える。たとえば、先行節では「大学教授も銀行家に用事がないようだった」と言うと、後ろの節とは論理関係を持たないとしか考えられない。(6'') も(6') と同様のことが言える。

「銀行家の方も大学の教授に頼みたい事があつたらしかつた」という理由によって、「二人を自分が仲に立って引き合せてやった」という結果が導き出されることも論理上成り立つ。

また、(6') の「し」節は「ので」節と同時に使用されない場合に、「ので」に置き換えてもいいと考えられる。(6) の場合は、「し」節が「から」節と置き換えられるが、「ので」と置換すると、すわりが悪くなる。日本語はいくつか原因節が羅列され結果節を導き出す際に、因果関係を明示化させる機能を持つ表現の「から、ので」などは「P₁ から、P₂ ので」や「P₁ ので、P₂ から」といった構文は許されるが、「P₁ から、P₂ から」、「P₁ ので、P₂ ので」のように、同じ表現が同一文の中に使用されることはなじまないのである。

(10)~(12) の構文は、「弱 ⇒ 弱」³⁾ の順序で並べるものであり、原因節はそれぞれ因果関係を明示的に示す機能を持たない同士によって構成されている。「弱 ⇒ 弱」の順序で羅列する「P₁ て、P₂ て→Q」型などは、「弱 ⇒ 強」⁴⁾ の順序で並べる「P₁ し、P₂ ので→Q」型と同様に、各原因節は結果節と直接的に結びついており、結果節との論理関係は一目瞭然である。たとえば、例(10) の場合は、原因節①と②を分散して、結果節と組み合わせると、以下のような文になる。

(10') 陽にあぶられ、思う存分に変形した。

(10”) 雨に浸されて、思う存分に変形した。

何れも結果を引き起こす直接的な原因として認められるので、結果節と直接的に結びついている関係が明らかになっている。

このように、単なるふたつあるいはふたつ以上の原因節を羅列して、ひとつの結果節を導く「P₁、P₂、P₃……→Q」構文モデルは、原因節の何れも、結果節と直接的な論理関係が発生し、結果節と同一表現階層にあると言えよう。

7.1.1.2 重層型 {(P₁ → Q₁) = P₂} → Q₂

この種類の複文の構造は鎖状の因果関係になっており、節と節の間に因果関係が存在するが、単純な因果関係より複雑である。P₁原因節はQ₁結果節の原因であるが、さらにふたつの節を合わせて原因節となり、ひとつの結果節が導かれる。日本語の中でこの種類の表現は少なくない。また、二重構造の類型よりさらに複雑な構造モデルも見られる。以下実例を参考にしながら、検討していく。

(13) 夕方から気温が下がって寒くなったので、杏子はずっと囲炉裏端に坐っていた。『あ』

(14) 風が次第に落ちて来て、煙が動かなくなったので、だんだんに息苦しくなって来た。

『黒』

(15) 岩竹さんの顔はますます腫脹が増して、水瓜のように丸々となったので、瞼が殆ど閉じたきりと同じになっていた。

『黒』

(16) 克平は会社の客と食事をするといていたので、どうせ帰宅は遅くなるだろうと思っ

て、八千代は先きに風呂にはいった。

『あ』

(17) 独りで極めて一人で喋舌るから、こっちは困まって顔を赤くした。

『坊』

(18) その晩は久し振に蕎麦を食ったので、旨かったから天麩羅を四杯平げた。

『坊』

(19) 読み通した事は事実だが、読む方に骨が折れて、意味が繋がらないから、又頭から読み直してみた。

『坊』

(20) 「…何しろ熱が劇しいので脳を犯しているから、もし睡眠剤が思う様に功を奏しないと危険である……」

『吾』

(21) 「へえ、せんだって御嬢様からいただきましたので、結構過ぎて勿体ないと思っ

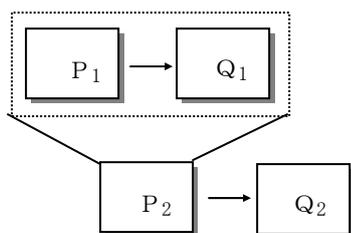
て行

- 李の中へしまっておきましたが、………」 『吾』
- (22) 鎖がついているので、八千代の足まではとどかず、何回もむだな努力を繰り返している。 『あ』
- (23) 岩竹さんの顔は極度に腫れて倍くらいの大きさになり、瞼を指でこじ明けなければ目が見えなくなったので、担架に乗せられて東の端の重症患者の教室に運ばれた。 『黒』
- (24) 手が出せないで、門をしめる事が出来ないから開け放しのまま行ってしまった。 『吾』
- (25) 赤シャツが席に復するのを待ちかねて、山嵐がぬっと立ち上がったから、おれは嬉しかったので、思わず手をぱちぱちと拍った。 『坊』
- (26) 但しその声は旅鴉の如く皺枯れておったので、切角の風采も大に下落した様に感ぜられたから所謂源ちゃんなるものの如何なる人なるかを振り向いて見るも面倒になつて、懐手のまま御成道へ出た。 『吾』

重層型になるものは、「て」節、動詞の連用形による原因節、「ず」節などと「から、ので」節と連用して、重層複文に形成するのが一般的な表現形式であるが、「から」節と「ので」節からなる重層複文も見られる。日本語では、因果関係を明示化させる接続成分と因果関係を明示化させない接続成分の何れもあるが、因果関係を明示化させないものから明示化させるものへと発展するのが一般的である。機能的または論理的には、因果関係の度合いが弱いものから強いものへと発展し、前者が後者に包含されるといったプロセスが基本的な表現用法であるが、実際には基本的な表現用法に背く場合もある。上例の中には、「～て／～り」節から「から／ので」節へと発展するものと、「から／ので」節から「～て／～ず」節へと発展するものいずれもある。したがって、重層型の構成は因果関係を明示的にされている節から明示的にされていない節に発展するといった文の存在も否認しない。

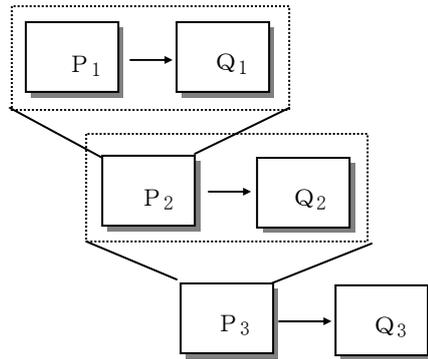
上例の中で、(13) ～ (24) の構造は $\{(P_1 \rightarrow Q_1) = P_2\} \rightarrow Q_2$ 式の二重構造のものであり、「P₁」と「Q₂」は同一階層に存在していないものだと考えられる。なぜならば、原因節 P₁ は結果節の「Q₂」とは直接的に関係していないからである。たとえば、例 (24) は、「P₁」の「手が出せない」という原因によって、「Q₁」「門をしめる事が出来ない」という結果が生じたが、「Q₂」の「開け放しのまま行ってしまった」という結果とは直接的な論理関係が発生しない。しかし、発生しないとはいえ、「P₁」と「Q₂」とは無関係だと言えない。というのは、「P₁」は最終的な結果の元原因になっているからである。つまり、「P₁」があつて、「Q₁」が生じ、「Q₁」によって、「Q₂」が生じた。論理的に考えると、

「P₁」と「Q₂」は間接的に関係しているものだと認めるべきである。したがって、「P₁」と「Q₂」は同じ階層に属していないとはいえ、「P₁」の存在は、間接的に「Q₂」に影響を及ぼすため、「Q₂」という結果の発生は「P₁」と「Q₁」によるものだと言える。よって、二重複文の構造モデルは以下のように図示できる。



【図16】 順行重層型構文上のQとPの関係図式 I

(25) と (26) は $[(P_1 \rightarrow Q_1) = P_2] \rightarrow Q_2 = P_3 \rightarrow Q_3$ 式の3重構造モデルである。この種の文は構造的には複雑であるが、階層間の論理関係は二重構造モデルと同様に考えてもよい。「P₁」の「赤シャツが席に復するのを待ちかね」という理由によって、「Q₁」の「山嵐がぬっと立ち上がった」という行為が行われた。「P₁」の「赤シャツが席に復するのを待ちかね」という理由は、「Q₂」の「おれは嬉しかった」とは直接的に関係しないが、「Q₁」は「Q₂」と直接的な関係を持っている。「Q₁」の「山嵐がぬっと立ち上がった」という行為が行われ、主人公が望んだ出来事が発生し、「Q₂」の「嬉しかった」という気持ちが生じた。しかし、元原因の「P₁」と「Q₁」はすべて主人公の目に映る光景であり、「P₁」の作用も間接的に「Q₂」に影響を及ぼすことは否定できない。また、「P₁」と「Q₁」の「赤シャツが席に復するのを待ちかねて、山嵐がぬっと立ち上がった」は、「Q₃」の「思わず手をぱちぱちと拍った」とは直接的な論理関係が発生しないが、「Q₂」の「嬉しかった」という心理状態は「Q₃」の「思わず手をぱちぱちと拍った」という行為と直接的な論理関係が発生する。このモデルの構造は、論理的に考えると、「P₁」は「Q₁」の発生原因であり、元原因の「P₁」と直接原因の「Q₁」は「Q₂」の発生原因である。さらに、元原因の「P₁、Q₁」と直接原因の「Q₂」は「Q₃」の発生原因となる。ここまでの分析によると、この構造モデルを以下のように図示できる。



【図17】 順行重層型構文上のQとPの関係図式II

7.1.2 逆行型構文モデル

逆行型構文モデルには、典型的な「 $Q \leftarrow P$ 」型、結果より複数原因をたどる「 $Q \leftarrow P_1, P_2 \dots\dots$ 」型、原因交差逆行重層型の「 $Q_2 \leftarrow \{ (P_1 \rightarrow Q_1) = P_2 \}$ 」型、因果関係が節レベルを越えた文レベルの「 $Q. \leftarrow P$ 」型、「 $Q \rightarrow P_1$ (否定)、 P_2 肯定」の5種類があると考えられる。まず、典型的な「 $Q \leftarrow P$ 」型とその拡張形式の「 $Q \leftarrow P_1, P_2 \dots\dots$ 」型について見てみる。

7.1.2.1 「 $Q \leftarrow P$ 」型と「 $Q \leftarrow P_1, P_2 \dots\dots$ 」型

逆行型は原因節と結果節の順序を変え、「 $Q \leftarrow P$ 」構文になり、原因節が強調される効果を生み出せる。日本語では、「Qのは、Pから(ため)だ」という構文形式が多く使用される。

分析に入る前に、混乱を招かないように、少し「 \leftarrow 」「 \rightarrow 」の意味について説明を加えておきたい。逆行型の矢印の方向は「 $Q \rightarrow P$ 」ではなく、「 $Q \leftarrow P$ 」になっている。「 \leftarrow 」の働きは表面に見られる構文形式の順序を意味するのではなく、文に含まれる論理関係の発生プロセスを意味しているのである。

(27) 墓石の前の花筒が青竹にかわっていたのは、喜助が、伐り竹をするたびに、とりかえるからであった。 『越』

(28) 杏子が梶大助に電話をかけたのは、この世で梶大助だけが、こういう場合に、人間はどう

- すべきであるかということを知っているのではないかと思ったからである。『あ』
- (29) わたしが昼の時刻を選んだのは、少女の留守を狙ったからである。『挽』
- (30) この鏡ととくに云うのは主人のうちにはこれよりほかに鏡はないからである。『吾』
- (31) 彼がこのマンションを借りたのは、^①駅に近いし、^②家賃も安いし、^③部屋がきれいだからです。 (自作)
- (32) 日本に温泉がたくさんあるのは、^①火山が多くて、^②水資源が豊富だからです。 (自作)

(27) ～(30)は、「Q←P」型であり、逆行型のもっとも典型的な構造になっている。この種類の文は、原因節と結果節が倒置されることにより、原因節が際立たせられている。

(31)と(32)は「Q←P₁、P₂……」型であり、先行の結果節に対して、後ろで複数の原因節が並べられている。「Q←P」構文の発展形式であるため、言うまでもなく、原因節全体が焦点化されている。(31)の原因は「P₁し、P₂し、P₃から」の3つの原因節からなり、それぞれ「Q」と以下のような文を構成できる。

- (31') 彼がこのマンションを借りたのは、駅に近いからです。
- (31'') 彼がこのマンションを借りたのは、家賃が安いからです。
- (31''') 彼がこのマンションを借りたのは、部屋がきれいだからです。

3つの文とも結果節「Q」との間に、直接的な論理関係を持っており、「Q←P」型として成り立つ。(32)も同様であり、「P₁て、P₂から」は、それぞれ「Q」との間に直接的な論理関係が生じ、「Q←P₁て」と「Q←P₂から」の「Q←P」型を構成できる。各原因節に原因を表す接続表現が置かれているが、「Q←P₁、P₂……」型における「から」の機能領域は順接型と異なり、原因節全体と関わっていると考えられる。なぜなら、「から」自身で原因節を焦点化させる機能を有しているが、「し、て」などの接続表現は、自身で焦点化させる機能を持たないからである。この点に関しては、(31') (31'')で既に反映されている。したがって、「逆行型」では、いくつか並列的に並べている原因節にそれぞれの接続表現があるとはいえ、文末の焦点化させる機能を持つ「から」の機能領域に入っていると言えるだろう。このように、「から」の機能領域を考慮すると、(31)のような構文形式を「Qのは←(P₁し、P₂し、P₃)から……」と表示しなければならないのだろう。すなわち、逆行型における接続表現の働きについて考える場合、順行型とは異

なり、節毎に見るのではなく、何れの原因節も文末の原因を表す接続表現の強調範囲に入るとのことである。

7.1.2.2 逆行重層型「 $Q_2 \leftarrow \{ (P_1 \rightarrow Q_1) = P_2 \}$ 」型

「 $Q_2 \leftarrow \{ (P_1 \rightarrow Q_1) = P_2 \}$ 」型は、複数の原因節があるが、原因節①と原因節②の範囲で考えれば、ふたつの節の間に論理関係が成立しなければならない構成になっている。また、原因節②は「 Q_2 」と直接的な論理関係を生じるが、原因節①は「 Q_2 」とは直接的な論理関係が生じない。なお、原因節①は原因節②の原因となっており、事態形成の元原因と認めるべきであるため、原因節①と結果節「 Q_2 」の間に間接的な論理関係を持つことも認められる。以下、実例を通して、検討していく。

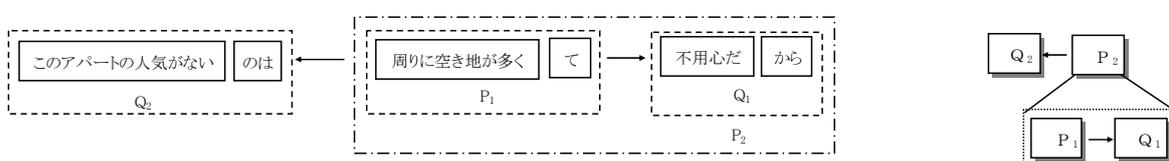
(33) もともと、喜左衛門も、竹細工をはじめたのは、^① 軀が小さくて、^② 腕力がなかったためである。 『越』

(34) このアパートの人気のないのは、^① 周りに空き地が多くて、^② 不用心だからです。(自作)

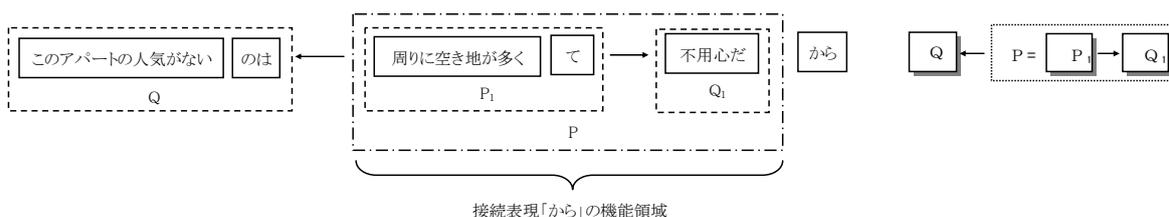
ここで、文学作品から抽出した例(33)について検討してみる。(33)の原因節①「軀が小さくて」と原因節②の「腕力がなかった」の間には、論理関係があることが考えられる。なぜならば、原因節①の「軀が小さくて」は「腕力がなかった」の原因として成立できるからである。この文を順行型に還元すると、「軀が小さくて、腕力がなかったため、竹細工をはじめた。」となり、 $\{ (P_1 \rightarrow Q_1) = P_2 \} \rightarrow Q_2$ という重層型構造となる。よって、逆行型でも、それと同様に考えられる。つまり、「軀が小さくて」は「腕力がなかった」と直接的に関わっており、因果関係が発生するが、「軀が小さくて」は「竹細工をはじめた」と直接的な論理関係を持つことができないということである。「竹細工をはじめた」と直接的な論理関係を持つのは原因節②であるが、原因節①は、元原因として、結果節と間接的な因果関係を持つことも考えられる。したがって、この文はふたつの原因節によってひとつの結果が導かれるものだといってもよい。ここで、原因節②の接続表現の「ため」の機能についても説明しておきたい。「ため」は、自身で原因を焦点化させる機能があるため、「 $Q \leftarrow P$ 」文においては、原因節全体と関わっていると考えられる。したがって、(33)

における「ため」の機能領域を表示しようとするれば、「 Q_2 のは←{(P₁て→Q₁)ため=P₂}」のように示すのがより正確だと思われる。

つまり、節と節の関係は、構文上は「 Q_2 ←{(P₁→Q₁) = P₂}」と解釈してもよいが、文末の「からだ・ためだ」の機能領域について考えれば、それらによって原因節の焦点が一体化され、原因節全体が結果節を導き出す排他的な原因表現になると考えられる。すなわち、「 Q ← P 」型と同様の機能を持つと考えられる。この種の文における構文上の関係と接続表現の機能領域を図示すると、それぞれ以下のようになる。



【図18】 逆行重層型のPとQの構文上の関係



【図19】 逆行重層型の接続表現の機能領域から見たQとPの関係

7.1.2.3 「Q。←P」型

日本語では、「 Q のは← P から(ため)だ」のように、原因が焦点化される「 Q ← P 」型が多く使用されるが、「 Q ← P から(ため)だ」のように、後ろの原因が先行結果に対する説明的かつ補足的な機能を果たすといった複文の構文形式は見られない。見られないというより、むしろ成り立たないといった方が正確である。日本語では、後者のような構文形式が認められる場合は、節と節の関係ではなく、文と文の関係である。つまり「 Q 。← P から(ため)だ」または「 Q 。←なぜなら、 P からだ」などのような構文形式となる。句点によって、ふたつの文になっており、後ろの文は、前の文に対する説明的かつ補足的な働きを果たしているといった関係である。日本語では、この種の文は複文の範囲に入っていないのに対して、中国語では先行する結果と後ろにある原因の関係は文レベル⁵⁾で成立するだけでなく、節レベル⁶⁾でも成立する。この種の文は、文の接続関係であるため、複

文の範囲から外すべきであるが、文と文の間に因果関係があり、1.2 節で論じる中国語の因果関係の構文モデルとのつながりもあると考えて、あえて、因果関係を表す一種の表現形式として取り上げた。

(35) 忠平の顔は変ってきた。玉枝のいうことに真実味があるというよりも、切羽つまったものが感じられたからである。 『越』

(36) 杏子は思わず顔を上げた。克平の言い方がおかしかったからである。 『あ』

(35) (36) は、「Q←P」型であるが、「Q」と「P」の関係は節レベルを越え、文レベルの「Q。←P」型になっている。先行文は結果であり、後ろの文に結果が生じた原因を補足し、説明している。文と文は倒置しているが、「Qのは←Pからだ」構文の意味合いとは異なっている。「Qのは←Pからだ」は、倒置することによって、原因節が焦点化されるのに対して、「Q。←P」型は、「P」で単なる結果を生じた原因について補足し、説明しているのみである。市川 (1978) ⁷⁾ では、文の接続関係について分析し、この種の文を補足型と称し、「前の文の内容に対して、あとの文で説明を補う関係。「それは……からだ」とか、「……のだ」とかの形か、または、「なぜなら」「というのは」の類の接続助詞を用いることが多い」と述べている。

7.1.2.4 「Q、←P₁ (否定)、P₂ (肯定)」型および「Q、←P (否定)」

「Q、←P₁ (否定)、P₂ (肯定)」型は、原因節①では、結果節が導かれる原因・理由を否定し、原因節②では結果節が導かれる原因・理由を判断し肯定するという構造モデルである。「Q、←P (否定)」型は、単なる結果が生じた原因に対する否定のみを提示する構造モデルである。

(37) 彼が一人暮らしを始めたのは、家族と一緒に暮らしたくないからではなく、転勤になったからである。 (自作)

(38) 日本で、アメリカ牛肉の輸入が制限されたのは、美味しくないとからではなく、狂牛病の恐れがあるためである。 (自作)

(39) わたしがまるで探偵のように、そんな推理をたてて、桂木夫人とオーバーの女が同一人だという証拠はない、と考へたりしたのは、夫人が貞潔な人妻であればよいとねがったからではなかった。 『挽』

(40) わたしがアイリスに行ったのは、父や谷岡夫人に頼まれたからではなかった。 『挽』

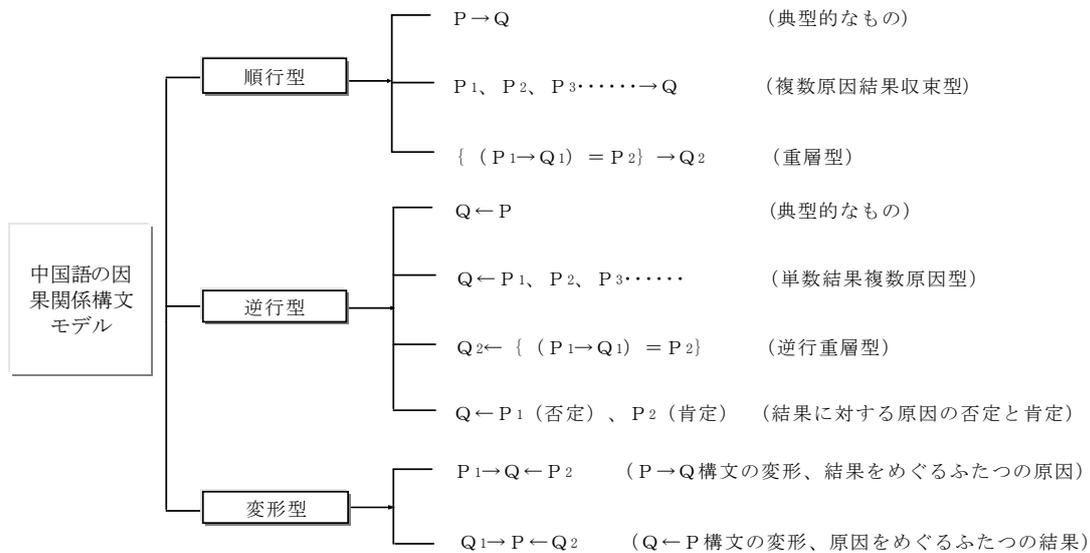
(37) (38)のいずれも、「Q、←P₁ (否定) P₂ (肯定)」型になっている。(37)は「Q→P₁からではなく、P₂からである」という「P₁」の「から」節を否定した上、「P₂」の「から」節を肯定するという構文になっている。(38)は「Q→P₁からではなく、P₂ためである」という「P₁」の「から」節を否定した上、「P₂」の「ため」節を肯定するという構文になっている。言うまでもなく、(37)の「から」節を「ため」節に置き換えても差し支えず、(38)の「P₁」を「ためではなく」、「P₂」を「からである」に変えてもよい。この種の文は、原因節を焦点化させる機能を持つ「から」と「ため」を言い換えることができる場合が多そうである。

(39) (40)は単なる結果が生じた原因に対する否定のみが提示される「Q、←P (否定)」型になっている。「Q」は「P」によって、導かれたものではなく、両者は真の因果関係にならず、「Q」と真の因果関係が構成されるものが省略されている。

以上、逆行型の構文モデルについて検討してきた。ここまでの分析を通して、順行型で成立する構文モデルは、逆行型でも成り立つということがわかる。しかし、逆行型では、節レベルの因果関係の成立は、「Qのは、←Pから(ため)だ」という原因強調型を取らなければならない。そうでなければ、文レベルの因果関係となり、「Q。←Pから(ため)だ」という結果説明補足型となる。

7.2 中国語の構文モデル⁸⁾

中国語の因果関係を表す複文には、多種多様な表現類型が見られる。接続表現の使用は任意である上、節と節の転位、変形も自由であるように思われる。中国語の複文は節間に接続表現が置かれなくても、語順と表現内容に頼って前後節の関係が読み取れるため、形態的な制約を受けにくいと言える。したがって、原因節と結果節の位置変換、ないし典型的な「P→Q/Q←P」構文類型からより複雑な構文類型へと拡大、発展といったような言語事象も観察される。中国語の表現モデルは以下のように分類できる。



【図20】 中国語の因果関係を表す複文における構文モデル

上記の分類を見ると、中国語の表現類型モデルは日本語より多様化されていることがわかる。以下、各構造モデルについて、実例を通して分析していく。なお、中国語の用例を取り上げる際、日本語の対訳が付いているものとそうではないものの2種類がある。日本語訳を持たない用例を扱う場合は、筆者による訳を添えることにする。

7.2.1 順行型構文モデル

中国語の順行型モデルには、日本語と同様に、“ $P \rightarrow Q$ ”型およびその拡張形式の“ $P_1, P_2, \dots \rightarrow Q$ ”型と、重層型モデルの“ $\{(P_1 \rightarrow Q_1) = P_2\} \rightarrow Q_2$ ”型といった3種類の構文モデルが含まれている。まず、“ $P \rightarrow Q$ ”型とその拡張形式の“ $P_1, P_2, \dots \rightarrow Q$ ”型について検討してみる。

7.2.1.1 “ $P \rightarrow Q$ ”型と“ $P_1, P_2, \dots \rightarrow Q$ ”型

日本語と同様に“ $P \rightarrow Q$ ”は因果関係の最も典型的な構文モデルである。“ $P_1, P_2, \dots \rightarrow Q$ ”型は、典型的な構造モデルの“ $P \rightarrow Q$ ”構文より発展した形式である。中国語では原因節に原因を表す接続表現が使用される場合、“因为”がもっとも多い。なお、中国語では、すべての原因節は接続表現によって表されるわけではなく、接続表現の使用

は任意であるため、接続表現を使用する場合と使用しない場合の何れもある。つまり“因为P→Q”のように、接続表現を使用する構文と、“P→Q”のように、因果関係を前後節の内容より読み取る構文の何れもある。以下、実例を見ながら、分析していく。

- [41] (因) 因为我对什么都满意, (結) 所以世界上也没有不满于我的。 《霜》
わたしはすべてのものに満足しているから世間でもわたしに不満をもつものはいない。 『霜』
- [42] (因) 因为明白了真相, (結) 道静的心立刻安静下来。 《青春》
真相があきらかになったので、道静の心は、すぐにおちつきをとり戻した。 『青春』
- [43] (因) 她们的住房并没有兵进去, (結) 所以东西一点也没有损失。 《家》
彼女たちの部屋には兵隊はいらなかったから、品物には別条はない。 『家』
- [44] (因) 因为他骂得有理, 骂得痛快, (結) 所以天天有人坐成一圈听他叫骂。 《钟》
言い分が通っていて、しかもものしり方が痛快なものだから、毎日多くの人が輪になって腰かけ、それを聞いて喜んでいた。 『鐘』
- [45] (因) 因为他不低头, 因为他不认罪, (結) 那伙人就把他关进了一个厕所, 《轮椅》
彼は屈服もせず、罪も認めなかったから、あいつらは彼をトイレに閉じ込めた。(拙訳)
- [46] 大多数孩子(因) 因为家里穷, 缺劳力, (結) 过早地挑起了劳动的担子。 《轮椅》
ほとんどの子どもは家が貧しく、労働力が足りないので、みな幼いころから家族を助けて働いている。(拙訳)
- [47] 这回(因) 因为正气忿, 因为要报仇, (結) 便不由的轻轻的说出来了。 《呐喊》
このときはちょうどむしゃくしゃしていて、仕返しをしたいと思っていた矢先だったので、うっかり小声がもれてしまった。 『呐喊』
- [48] (因) 她既是新近迁来, 又不常回家, (結) 所以院里的人们对她几乎都不熟识, 《钟》
引っ越してまもないうえに、あまり帰ってこないので、院内の人たちは、ほとんど彼女を知らない。 『鐘』
- [49] (因) 他不肯上炕来坐, 地下又没有凳子, (結) 我便也跳下炕去。 《我在》
オンドルには上がろうとせず、土間に腰掛けもないので私も下へおりた。 『霞村』
- [50] 加上(因) 她是一个“改革派”的脚, 我的精神又不大好, (結) 我们上午就出发, 太阳快下山了, 才到达目的地。 《我在》

おまけに彼女は「改造派」の纏足だ^①、私も気分がすぐれない^②ので、午前中に出発したのに、陽が山へ沈む頃になってようやく目的地へ着いた。 『霞』

[51] (因) 鄧久寬^①耳朵有点聋, 又加上他^②大声吆喝牲口, (結) 所以^③没有听到高大泉的喊声。《金光》
鄧久寬は耳が少し遠い^①、大声でロバを追っている^②ので^③高大泉の叫びもきこえなかった。 『輝け』

[41]～[43] は“P→Q”型である。[41]の前後節にそれぞれ原因と結果を表す接続表現が使用され、“因为P→所以Q”になっている。[42]は原因を表す接続表現の“因为”が使用され、“因为P→Q”構文形式になっているが、[43]は結果を表す接続表現の“所以”が使用され、“P→所以Q”構文形式になっている。

[44]～[51]は複数原因結果収束型の“P₁, P₂, ……→Q”構文モデルであり、中国語では、比較的多く使われている構文モデルである。“因为P₁, 因为P₂……→Q”の“GP₁, GP₂……”型、“因为P₁, P₂……→Q”の“GP₁, P₂……”型、接続表現を使用しない“P₁, P₂……→Q”といった表現形式が用いられている。原因を表す接続表現が使用される場合、ふたつの表現形式がある。つまり、あらゆる原因節に接続表現が置かれる表現形式と、同一文内で接続表現が置かれる原因節もあれば、置かれない原因節もあるといった表現形式の何れもある。前者の場合は、各節の原因を表す接続表現の働きは所属節に限られている。後者の場合は、接続表現が置かれる位置は決して任意ではなく、接続表現は原因節①に置かなければならない。また、第二節に接続表現がないため、原因節①に置かれる原因を表す接続表現の機能領域は第二節まで関係していることも考えられる。まず、複数の原因を表す接続表現が使用される用例について分析してみる。

例[45]の原因節①と②にはそれぞれに典型的な原因を表す接続表現の“因为”が使用されている。ふたつの節を羅列して結果節と直接的に結びついている。

[45’]] 因为^①他不低头, 那伙人^②就把他关进了一个厕所。

[45”]] 因为^①他不认罪, 那伙人^②就把他关进了一个厕所

上記の通り、[45’]と[45”]の何れも成立する。また、並列しているふたつの原因節の順序を変えても、意味が変わらず、各節にある原因を表す接続表現の“因为”の機能領域は所属節に限られている。さらに各節に原因を表す接続表現が使用される場合、同じも

のでなければならない。中国語では、原因を表す接続表現の“由于”も多く使用されるが、原因節を並列に並べていく場合、日本語のように、異なる接続表現を使用することは認められない。たとえば、

[45’”] * 由于他不低头，因为他不认罪，那伙人就把他关进了一个厕所。

[45’”]では“由于”と“因为”がともに用いられ、原因節の間の並列的なニュアンスが読み取れなくなった。中国語の原因を表す接続表現は論理的であり、日本語の「し／て」のように単なる因果関係を表すだけではなく、並列関係を伴う因果関係と継起関係を伴う因果関係を表す機能を持っていない。したがって、ふたつの原因節に異なる接続表現が使用されると、独立性の強いものになってしまい、原因節の間の並列的な意味合いが消えるのである。原因を表す接続表現が同じものであれば、“因为 P1, 因为 P2……”、“由于 P1, 由于 P2……”という“GP1, GP2……”の表現形式となり、中国語のレトリックのひとつの“排比”⁹⁾ という機能によって、節と節の並列性が生み出される。しかし、先頭の原因節のみに接続表現が置かれる場合、原因節①と②の間の並列性に影響を及ぼさない。たとえば、例(44)は原因節①のみに接続表現が置かれ、原因節①と②の間に、接続表現がなくても、内容により、それぞれが原因節になっていると判断できる。しかも、ふたつの節の間に並列的に並べていく意味合いを帯びている。ただし、接続表現が置かれる原因節①とそれと並列している原因節②の順序を変えようとする場合、原因節同士の間での順序の入れ替えしかできず、原因①に位置する原因を表す接続表現は移動できない。

[44’] * 骂得痛快，因为他骂得有理，所以天天有人坐成一圈听他叫骂。

[44”] 因为他骂得痛快，骂得有理，所以天天有人坐成一圈听他叫骂。

[44’]の[骂得痛快]は後ろの[所以天天有人坐成一圈听他叫骂]とのつながりが、第二節の先頭に立つ原因を表す接続表現に遮断され、無関係のもの同士であるように見える。[44”]は原因を表す接続表現を移動せず、単なる原因節同士の入れ替えなので、原因節のいずれも、結果節と論理的な関係が発生し、意味的にも[44]と同様である。よって、複数の原因節を羅列して、原因を表す接続表現が文頭にしかない場合は、原因を表す接続表現の機能領域は最後の原因節まで関係しているということがわかる。つまり[(因为他骂得有

理) , 骂得痛快] だと考えるのではなく、[因为他 (骂得有理, 骂得痛快)] だと考えるべきである。

[48]~[51]は接続表現が使用されておらず、複数の原因節を並列的に並べていく“P₁, P₂……→Q”という表現形式である。接続表現が使用されていないが、各原因節と結果節との間の論理関係が読み取れる。たとえば、[51]の場合は、原因節①と②を分散して、それぞれ結果節と結び付けることができる。

[51'] 邓久宽耳朵有点聋, 所以没有听到高大泉的喊声。

[51"] 他大声吆喝牲口, 所以没有听到高大泉的喊声。

[51'] の [耳朵有点聋 (耳が遠い)] という身体的な支障によって、[没有听到高大泉的喊声] という結果が生じたのに対して、[51"] は [大声吆喝牲口] から、他のことにまったく気付いていないという状態も想像できる。それによって、「所以没有听到高大泉的喊声」という結果が生じるのも決して不自然ではない。

以上の分析によれば、中国語の“P₁, P₂……→Q”型の原因節の並べ方は、因果関係の度合いの制約を受けず、接続表現の位置または統一性の制約を受けるということがわかる。接続表現の位置について言えば、複数の原因節にひとつの接続表現しか置けない場合、接続表現の位置は文頭でなければならないということを指している。因果関係の度合いの角度から原因節の並べ方について考えれば、決して「強 ⇒ 弱」ではなく、「G (弱 ⇒ 弱)」だと考えるべきである。

統一性について言えば、各原因節に原因を表す接続表現が置かれる場合、同じ接続表現でなければならない、節と節の並べ方は「強 ⇒ 強」である。また、反対に各原因節に接続表現を置かず、単なる原因節同士で並んでいくという場合もある。この場合は、節と節の並べ方は「弱 ⇒ 弱」である。複数の原因節があり、接続表現が先頭しか置けないものにも統一性が見られる。その場合、節と節の並べ方は“G (弱 ⇒ 弱) ”と考えられ、また“強 ⇒ 強”とも考えられる。というのは、“G”は同一接続表現であるので、各原因節への働きかけは同様だからである。具体的な原因を表す接続表現を入れてみると、“因为 (P₁, P₂……)” という“G (弱 ⇒ 弱) ”構文を、“因为P₁, 因为P₂……”という“強 ⇒ 強”構文として考えてもよい。たとえば、前述した(40)の原因節[因为他 (骂得有理, 骂得痛快)] は“因为 (P₁, P₂……)” という“G (弱⇒弱) ”構文であるが、[因为

他骂得有理，因为他骂得痛快] のように、““因为 P1，因为 P2……” という “強 ⇒ 強” 構文に変えてもよい。

7.2.1.2 重層型モデル {(P1 → Q1) = P2} → Q2

中国語では、{(P1 → Q1) = P2} → Q2 型は少なくない。この種の文は、原因節が後ろの結果節の行動の理由になっているものが多くあり、ほとんどの結果節で接続表現が省略されず、そのまま用いられている。

[52] (因){(因)她^因现在独身一人，(結)不愿为生火做饭浪费光阴精力}，(結)^{所以}时常就在单位食堂就餐，在医务室中就宿，…… 《钟》

いまは独身な^{ので}、ご飯の支度に時間をかける気も起こら^ず、たいてい勤め先の食堂ですませ、医务室に泊まっているという。 『鐘』

[53] “(因){(因)夏天死的，(結)运不回来}，(結)^{只好}埋在了村后的山坡上。” 《插》

「夏に死んだ^{から}遺体を移送できなく^て、村の裏の山腹に埋めたわ」 『遙か』

[54] 这时候在房里，鸣凤还跪在椅子上，(因){(因)她没有听见什么声音，(結)以为觉慧已经去了}，(結)^便偷偷地把纸窗帘卷起半幅。 《家》

このとき部屋の中では鳴鳳がまだ椅子の上にひざまずいていた。彼女にはもう何も聞こえず^ず、覚慧も去ったと思っ^て、そっと窓かけを掲げてみた。 『家』

[55] 在这个公馆里，大部分的人(因){(因)^{因为}一夜没有休息，(結)支持不住}，(結)^便早早地睡了。 《家》

この邸もまた静寂に返ってゆく。大部分の人が徹夜した^{ので}、堪らなくなっ^て早々に床にはいる。 『家』

[56] (因){(因)^{因为}煤块砸伤了脚，(結)好几个月不能上班}，(結)^{结果}叫路局裁下来了。 『青春』

石炭の塊りで足にけがを^し、数カ月間出勤できなかった^{ために}、鉄道局から首をきられてしまった。 『青春』

[57] “她(因){(因)^{因为}找不到工作，(結)无处泄愤}，(結)^就常常找我出气。” 《青春》

「仕事の口が見つからなく^て、むしゃくしゃしてるもんだ^{から}、いつもぼくにあたるのさ。」 『青春』

上掲した用例の構造は全て $\{(P_1 \rightarrow Q_1) = P_2\} \rightarrow Q_2$ 型になっている。中では、原因を表す接続表現が使用されるものと使用されていないものの2種類がある。使用される場合は先頭に立つ「P₁」原因節のみに置かれているが、結果と原因のふたつの役目を担っている節には原因を表す接続表現ないし結果を表す接続表現の何れは置かれていない。表現形式としては、“ $\{(P_1 \text{ 因为} \rightarrow Q_1) = P_2\} \rightarrow \text{便} Q_2$ ” または “ $\{(P_1 \rightarrow Q_1) = P_2\} \rightarrow \text{便} Q_2$ ” などがある。文頭に立つ原因を表す接続表現は、“P₁, P₂……→Q” の機能領域とは異なって、先頭の原因節までしか関わっていない。たとえば、(56)の場合は、[因为煤块砸伤了脚]という出来事によって、[好几个月不能上班]という結果が導き出され、節と節の間に論理関係が成立する。したがって、原因節に立つ接続表現は[煤块砸伤了脚]までにしか影響を及ぼさない。

[52]～[57]の文の構造は前述した日本語と同様に解析できる。先頭に立つ原因節はふたつ目の節の原因となり、ふたつ目の節は先頭の節によって導かれた結果となる。また、ふたつ目の節は、三つ目の節の原因となり、三つ目の節はふたつ目の節の結果となる。つまり、ふたつ目の節とひとつ目の節との関係は直接的に結びついている因果関係であり、ふたつ目の節は三つ目の節との関係も前者と同様に解釈できる。しかし、ひとつ目の節はふたつ目の節の原因であり、さらに、ふたつ目の節は三つ目の節の原因であるので、ひとつ目の節は最終的な結果の元原因となっていることもみなすべきである。つまり、ひとつ目の節は結果節との関係は間接的な因果関係である。ここで、もう一度(56)を分析してみる。

[56’] 因为煤块砸伤了脚 ， 好几个月不能上班。

[56”] 好几个月不能上班 ， 结果叫路局裁下来了 。

[56’ ”] * 因为煤块砸伤了脚 ， 结果叫路局裁下来了。

[56’] [56”]は論理関係が成立するが、[56’ ”]は論理関係が成立しない。しかし、ひとつの文になる場合は、「叫路局裁下来了」という結果が生じた原因は「好几个月不能上班」であり、「好几个月不能上班」という結果が生じた原因は「因为煤块砸伤了脚」であるといったように遡ると、「因为煤块砸伤了脚」が最終結果の「叫路局裁下来了」の元原因になっているのがわかる。このように、「因为煤块砸伤了脚」と「叫路局裁下来了」との間に間接的な因果関係を持つことも認めなければならない。つまり、「叫路局裁下来了」という結果の発生は、「間接原因+直接原因」によるものである。

7.2.2 逆行型構文モデル

逆行型には、典型的な“Q←P”型、“Q←P₁, P₂……”型、逆行重層型の“Q₂←{(P₁→Q₁) = P₂}”型の3種がある。まず、“Q←P”型と“Q←P₁, P₂……”について見てみる。

7.2.2.1 “Q←P”型と“Q←P₁, P₂……”型

中国語における“Q←P”型には、“之所以Q←是因为P”と“Q←因为P”の2種類の表現形式が見られる。

- [58] (結) 觉新领头走, (因) 因为他现在是在“承重孙”了。 《家》
觉新が先達である。彼は現在相続人になったからだ。 『家』
- [59] (結) 他不能自制的只想回过头去看, (因) 因为他觉得背后很热闹, 有人来来往往的走了两三回。 《彷徨》
自制できないほど、彼は後をふり返って見たくてならなかった。というのは、背後でひどく騒がしい、誰かが二度も三度も行ったり来たりしているような物音がしたからだ。 『彷徨』
- [60] (結) 他的心不再感到不安, (因) 因为那是一颗坚硬冰冷的石头。 《轮椅》
彼は二度と不安にならなかった。心のかわりに冷たい石があるだけだからだ。 『車』
- [61] 我不敢相信这是爸爸回来了, 但是(結) 我又不得不相信, (因) 因为爸爸已经站在了我的面前。 《轮椅》
父が帰って来たとは信じにくかったが、信じないわけにはいかなかった。なぜなら、父はもう私の前に立っていたから。 『車』
- [62] 他虽不说什么, 可是(結) 心中暗自喜欢, (因) 因为他已经是这么高大, 《骆》
口にはださないながら、うれしくてたまらなかった。おれはもうこんなに大きくなったのだ。 『駱』
- [63] (結) 他之所以爱上了这项运动, (因) 完全是因为其父的影响和传授。 《当》
彼はこの運動が好きになったのは、完全にお父さんの影響と伝授を受けたからである。 (拙訳)

- [64] (結)我之所以捐款救助失学孩子, (因)是因为我是一名教师也是一个母亲。 《当》
 わたしが寄付して学校に行けない子供を助けるのは、わたしが教師でもあり母親でも
 あるからである。 (拙訳)
- [65] (結)人们之所以对此书推崇备至, 视为珍品, (因)是因为书中有宝。 《当》
 人々がこの本を極めて尊重し、珍品だと見なすのは、本の中に宝物があるからである。
 (拙)
- [66] (結)他们将寻求在东南亚、中国和^①中欧设立据点, (因)因为这些地区的^②市场成长快速, 竞争程
 度较低。 《当》
 彼らは東南アジア、中国と中欧に拠点を設立することを求める。なぜならば、これら
 の地区の市場成長が速いし、競争レベルが低いからである。 (拙訳)

上掲用例の中で、[58]～[65]は典型的な“Q←P”型であり、[66]は“Q←P”型の拡張形式の“Q←P₁, P₂……”型である。[58]～[65]の用例には“之所以Q←是因为P”と“Q← 因为P”の2種類のものが含まれている。“之所以Q←是因为P”の表現機能に関して、邢福义(1997)¹⁰は、「重在断定结果产生的原因。形式上，常用“(之)所以……(就/是)因为……”之类格式。(結果が生じる原因を断定することに重点を置く。形式上は“(之)所以……(就/是)因为……”などのものがよく用いられる。)」と述べている。“Q, ← 因为P”の表現機能についても、「重在补充说明结果产生的原因。形式上，只在补说原因分句前头用“因为”，“因为”前边不用“正(是)、就”之类。(結果が生じた原因を補足し説明することに重点を置く。形式上は原因を補足する分句(節)の前に“因为”を使用するが、“因为”の前に“正(是)、就”などを使用しない)」と記述している。

邢(1997)によると、“之所以Q←是因为P”表現形式と“Q← 因为P”表現形式は構造的に同じ“Q←P”に属しているが、表現機能は違いがあるということがわかる。つまり、“之所以Q←是因为P”は原因節を焦点化させる効果があるのに対して、“Q←因为P”は単なる結果が生じた原因を後ろで補足し説明しているだけだということである。

“之所以Q←是因为P”は日本語の「Qのは←Pから(ため)」と同様な働きを持つ表現形式であり、原因節が焦点化されている。“Q, ← 因为P”は、中国語では多く使用される表現形式である。中国語は接続表現に拘泥せず、節と節の位置は自由に変えられるので、“Q←因为P”も複文として成り立つ。この点は日本語と異なっている。日本語では、「Q

のは←から（ため）」を複文レベルのものだと扱えるが、「Q←からである（ため）」は節と節の関係であれば、成り立たない。「Q←からである（ため）」の成立は節と節の関係ではなく、「Q。←から（ため）である」という文と文の関係でなければならない。この点に関しては、7.1.2 では既に論じたが、中国語原文と日本語訳文を対照的に見ると、両者の相違を一層見極めることができるだけでなく、7.1.2 で述べたことについての更なる裏付けにもなるだろう。

原文の“Q←因为P”に対して、日本語訳文ではすべて「Q。←P」という構文形式で対応している。意味的には両者が等価になっているが、形式または構成単位は等価になっていない。

[66]は“Q←P”型の拡張形式の“Q←P₁, P₂……”型であり、原因はふたつの節からなる。節と節の間に論理関係はなく、並列的に並べていく。先頭に立つ原因を表す接続表現の機能領域は、順行型と同じく、原因節の最後まで関係しており、各節の因果関係の度合いの強弱度は同様であり、統一性を持つものだと考えなければならない。ふたつの原因節をそれぞれ先行節の結果と組み合わせてみると、以下のような文になる。

[66'] 他们将寻求在东南亚、中国和中欧设立据点，因为这些地区的市场成长快速。

[66"] 他们将寻求在东南亚、中国和中欧设立据点，因为这些地区的竞争程度较低。

[66']と[66"]はいずれも、結果節と原因節の間に論理関係があり、自然な因果関係を表す複文になっている。

[66]のような構文は原因節が先行の結果節の発生について補足し説明しているものがあるが、それを焦点化させ、“(之)所以……是因为……”型に変えると、以下のようなになる。

[66'"] 他们之所以将寻求在东南亚、中国和中欧设立据点，是因为这些地区的市场成长快速，竞争程度较低。

[66'"]の原因節①の前に立つ“是因为”と日本語の「Q←P」型における文末の「からだ」「ためだ」との機能領域は同様だと考えられる。つまり、原因節全体と関わっており、原因節全体を焦点化させるという働きを持つということである。しかし、焦点化され

なくても、原因節①の前に立つ原因を表す接続表現の機能領域は原因節全体と関係していると認めなければならない。たとえば、[66]のようなものである。[66]と[66'"]の違いは、[66]の原因節は結果節に対する説明と補足であるのに対して、[66'"]は結果が生じる原因を断定することに重点を置き、原因節を焦点化させるということである。中国語では、いくつか原因節を羅列して、ひとつの結果を導き出す場合、順行型でも、逆行型でも、または原因節が焦点化されるか否かと関係なく、接続表現の機能領域は最後の原因節まで関係していると言える。

7.2.2.2 逆行重層型 $Q_2 \leftarrow \{ (P_1 \rightarrow Q_1) = P_2 \}$

[67] (結)我国出口商品价格较低，这主要(因)是因为我国劳动力便宜，生产成本较低。 《当》
わが国で 輸出商品の価格が比較的低いのは、主に我が国の労働力が安く、生産コスト
が低いからである。 (拙訳)

[67]は焦点マーカの“是”が用いられることによって、原因節が焦点化されている。後ろのふたつの原因節は決して並列関係だとは考えられない。というのは、原因節①の[劳动力便宜]と原因節②の[生产成本较低]の間に論理関係が成立するからである。原因を表す接続表現の“是因为”が原因節①に置かれているが、その働きは原因節②までに影響しており、[是因为(我国劳动力便宜，生产成本较低)]のように考えなければならない。原因節①の[劳动力便宜]と[我国出口商品价格较低]との間に直接的な論理関係が読み取れにくい、[生产成本较低]と[我国出口商品价格较低]との間には直接的な論理関係が読み取れる。

[67'] * 我国出口商品价格较低，是因为我国劳动力便宜。

[67"] 我国出口商品价格较低，是因为我国生产成本较低。

しかし、主節との関係が直接的かどうかに関わらず、焦点マーカ“是”によって、原因節が焦点化された以上、いずれの原因節も“是因为”の機能領域に入り、結果を導く排他的な原因のひとつと考えられる。つまり、節と節の関係は、構文上は「 $Q_2 \leftarrow \{ (P_1 \rightarrow Q_1) = P_2 \}$ 」と解釈してもよいが、原因を表す接続表現の機能領域について言えば、“是因为”

によって原因節の焦点が一体化され、「Q←P」型と考えなければならないと言えるだろう。逆行型における“是因为”の機能領域は、日本語の「～からだ、～ためだ」の機能領域と同様に考えられる。つまり、原因節内部の論理関係のありなしに関わらず、原因節全体を焦点一体化させる機能を有している。

7.2.2.3 “Q, ←P₁ (否定) P₂ (肯定)”型および“Q, ←P₁ (否定)”型

“Q, ←P₁ (否定) P₂ (肯定)”型では“之所以Q←不是因为P₁, 而是因为P₂”、“之所以Q, ←不是由于P₁, 而是由于P₂”、“之所以Q, ←不是因为P₁, 而是由于P₂”、“之所以Q, ←不是由于P₁, 而是因为P₂”といった表現形式が多いと考えられる。“Q, ←P₁ (否定)”型では“之所以Q, 不是因为P₁”または“之所以Q, 不是由于P₁”といった表現形式の使用が多いと考えられる。

[68] (結) 外国汽车界之所以看好中国市场、(因:否) 不是他们对中国有什么偏爱、(因:肯) 而是因为中国的轿车市场已经由潜在变成了现实。 《人民》

外国の自動車業社が中国市場を気に入ったのは、中国に何らかの偏愛を持っているからではなく、中国の自動車市場がすでに潜在的なものから、現実的なものになったからである。 《当》

[69] (結) 技术成果之所以成为商品、(因:否) 并不是由于人们让它成为商品、(因:肯) 而是因为它们本身具有商品的属性。 《技术》

技術成果は商品になったのは、人々がそれらを商品にしたためではなく、それら自身が商品の属性を持つからである。 (拙訳)

[70] (結) 这场比赛之所以输给了对方、(因:否) 并不是因为我们球技不好。 (自作)

この試合に負けたのは、私達のボールテクニックが下手だからではない。

[68][69]のいずれも、“Q、←P₁ (否定) P₂ (肯定)”型になっている。(68)は“Q←不是P₁, 而是因为P₂”という構文形式であり、P₁前のマーカーの“不是”の後ろに原因を表す接続表現が現れていないが、省略されたと考えられる。実際に“不是”の後ろに原因を表す接続表現の“因为”または“由于”の何れを入れても、極めて自然な文になりうる。

[68'] 外国汽车界之所以看好中国市场，不是因为他们对中国有什么偏爱，而是因为中国的轿车市场已经由潜在变成了现实。

[68"] 外国汽车界之所以看好中国市场，不是由于他们对中国有什么偏爱，而是因为中国的轿车市场已经由潜在变成了现实。

“Q、←P₁ (否定) P₂ (肯定)”型は、いくつかの原因節を羅列して、ひとつの結果を導き出す構文の接続表現の使用条件とは異なっている。原因節は否定表現と肯定表現が並列しているため、原因を表す接続表現の使用が統一されなくても、差し支えない。したがって、原因を表す接続表現の“因为”と“由于”の使用は自由に組み合わせることができる。ちなみに、原因節は「否定と肯定」の組み合わせではなく、「否定+否定」または「肯定+肯定」である場合は、原因を表す接続表現の統一が求められる。

[70]は“Q、←P (否定)”型であり、結果を導き出す原因を、「P」で否定して、結果を生じさせる真の原因が提示されず、「Q」と「P」の関係が因果関係という依存関係にならない。

7.2.3 変形型

変形型では、結果をめぐる二つの原因の“P₁←Q→P₂”型と、原因をめぐる二つの結果の“Q₁←P→Q₂”型の2種類の構文が観察される。まず、“P₁←Q→P₂”型について分析してみる。

7.2.3.1 変形型① “P₁→Q←P₂”

“P₁←Q→P₂”型(原因→結果←原因)は三つの節によって構成され、前と後ろに位置する節は、原因節であり、中間に位置する節は結果節である。つまり、「Q」は前の原因節と結びつく結果節であり、後ろの原因節と結びつく結果節でもある。以下、各用例の中心となる結果部分を波線で示す。

[71] (因) 她不便打搅，(結) 只好守在门口候他，(因) 因为耀鑫回家得经过她家门口。 《当》

彼女は邪魔したらよくないのかと思って、自分の家の戸口で待つことにした。耀鑫は家に帰るときに、彼女の家を通らなければならないからである。(拙訳)

[72] (因) 越来越少的人愿意与他往来, (結) 他只好对酒当歌, 一醉方休, (因) 因为他在清醒时无法忍受自己的内疚和羞耻。《读》

彼と交流したい人はますます減っている。だから、彼は酒に溺れ、酒で神経を麻痺させている。なぜならば、意識がはっきりしているときには、後ろめたくて、恥ずかしくてたまらなかったからだ。(拙訳)

[73] (因) 这样奇妙的音乐, 我在北京确乎未曾听到过, (結) 所以即使如何爱国, 也辩护不得, (因) 因为他虽然目无所见, 耳朵是没有聋的。《呐喊》

こんな珍しい音楽は、たしかに北京では聞いたことがない。だから、いかにお国自慢であつても弁護するわけにはいかない。彼は、目は見えないが、耳はツンボではないのだから。『呐喊』

[71]～[73]の構造はいずれも“P₁→Q←P₂”型になっており、真ん中に位置する結果節は両側のふたつの原因節のいずれとも結びついている。「P₁」によって「Q」という結果が導かれ、「P₁→Q」という順行型論理関係が構成されている。また、「Q」という結果が生じた原因について、さらに「P₂」によって補足し説明され「Q←P₂」という逆行型論理関係が構成されている。つまり、一文の中に順行型と逆行型の2種類の因果関係構文モデルが含まれている。文の全体的な展開順序は「順⇒逆」になっている。「P₁」は「Q」を引き起こす原因・理由になっているのに対して、「P₂」は単なる「Q」という結果が生じた原因・理由について補足し、説明している。ここで具体的な例について検討してみる。たとえば、[71]の場合は、「P₁」と「P₂」をそれぞれ「Q」と組み合わせてみると、文の構成が一目瞭然になる。

[71'] 她不便打搅, 只好守在门口候他。

[71"] 她只好守在门口候他, 因为耀鑫回家得经过她家门口。

[71']は[她不便打搅]によって、[只好守在门口候他]という行為が導かれており、[71"]は[因为耀鑫回家得经过她家门口]が[只好守在门口候他]という行為を行う理由について補足し説明している。「P₁」の[她不便打搅]は「Q」との関係は言うまでもなく直接的な

因果関係であるが、補足的かつ説明的な「P₂」の[因为耀鑫回家得经过她家门口]と「Q」の関係も直接的な論理関係だとも言える。「P₂」と「Q」の位置を入れ替えると、両者の関係がわかる。

[71'"]] 因为耀鑫回家得经过她家门口, 她只好守在门口候他。

このように、中国語では、同一文において、順行型因果関係と逆行型因果関係が含まれるのが許されていることがわかる。中国語は接続表現に拘らず、語順と「,」によって文を展開していく場合が多いので、複文のサイズを拡大したり、収束したりするのに一定の自由がある。複文レベルの“P₁←Q→P₂”型を、文の接続関係である“P₁←Q。→P₂”型に変えてもよい。

[71'"]] ① 她不便打搅, ②只好守在门口候他。 ③因为耀鑫回家得经过她家门口。

[71'"]]の構造は文の接続関係であり、前の文の内容に対して、後の文で説明を補う関係。①と②はひとつの因果関係を表す複文となり、③は単独に一文となっている。文と文の関係であるので、後ろの文は前の文の全体に対して説明を補っていると考えなければならない。意味的には“P₁→Q←P₂”型と同様であるが、機能的には相互の働きかけは異なっている。

いずれにせよ、中国語では“P₁→Q←P₂”型と“P₁→Q。←P₂”型の構文モデルの何れも許される。この点において、日本語とは異なる。日本語は形態を重視し、構文上は様々な制約を受けやすいため、“P₁→Q←P₂”型は成り立たないと言える。日本語の構文の特徴が(71)～(73)の日本語訳文にも反映されている。三つの用例とも、文と文の関係であり、“P₁→Q。←P₂”型、または“P₁→。Q。←P₂”型という構文になっている。このように、「P₁→Q←P₂」型は、日本語では、複文レベルのものとして成り立たず、文の接続関係でなければならないということがわかる。

7.2.3.2 変形型② Q₁←P→Q₂

“Q₁←P→Q₂”型(結果←原因→結果)も、三つの節からなる。前と後ろの節は、

結果節であり、真ん中の節は原因節である。「P」は前の結果節と結びつく原因節であり、後ろの結果節と結びつく原因節でもある。以下、各用例の中心となる原因部分を点線で示す。

[74] (結) 同学中，她只和一个名叫陈蔚如的女孩子要好，(因) 因为那女孩子对她温存、和善，她同情林道静的不幸遭遇，给她热情和鼓舞， (結) 因此她们成了好朋友。 《青春》

クラスメートの中で、ただひとりの仲良しは、陳蔚如だった。この娘は林道静をあたたく迎え入れてくれ、性格もやさしく、林道静の不幸な運命に同情して、いつもはげましてくれたからだ。こうして、ふたりはすっかり親友になった。 『青春』

[75] (結) 他必须稳稳当当的快到城里，(因) 因为他身上没有一个钱，没有一点干粮， (結) 不能再多耗时间。 《駱》

ぐずぐずしてはいられないぞ。金もなければ食いものもないのだ。これ以上、途中でひっかかったりせず、しかも一刻もはやく北平へ帰りつかなければ。 『駱』

[76] (結) 我的生意不错，(因) 就是因为我不赚‘黑心钱’， (結) 所以回头客多，大家给面子。《当》
わたしの商売はまあまあいい。これはわたしが‘良心に背く金’を儲けようとしないからだ。だから、常連客が多く、みんな面子を立ててくれるのだ。 (拙訳)

[77] (結) 小花脸任何箱子都可坐，(因) 这是因为相传唐明皇扮过小花脸的戏， (結) 因此地位最高。 《当》

敵役はどんな箱でも座ることができる。これは伝えられるところによれば、唐明皇も敵役を演じたことがあるそうだから。それで、地位がもっとも高いのだ。 (拙訳)

[74]～[77]の構造はいずれも“Q₁←P→Q₂”型になっており、真ん中の原因節「P」は両側のふたつの結果節のいずれとも論理関係を持っている。[74]と[75]は「Q₁」が生じた理由を「P」によって補足し説明され、“Q₁←P”という「逆行型」因果関係構文が構成されている。さらに「P」によって「Q₂」という結果が導かれ、「P→Q₂」という「順行型」因果関係構文が構成されている。(76)(77)は、「Q₁」が生じた原因・理由が「P」によって補足されるのではなく、「P」には“就是”“是”といった原因を強調する成分が使用されているため、結果が生じた原因についての分析と判断となる。したがって、「Q₁→P」は因果関係が強調されている「逆行型」であり、「P→Q₂」は原因節が強調されて

いる「順行型」である。つまり、このような文は原因節「P」が全文の焦点となり、もっとも際立てられている部分である。上例のいずれも、一文の中に「逆行型」と「順行型」の2種類の因果関係構文モデルが含まれており、文全体的な構成順序は「逆⇒順」になっている。

上掲の用例は「P」と「Q₂」を「Q₁」に対する結果が生じた原因の補足、あるいは結果が生じた原因についての分析と判断とみなして、単なる“Q←P”型だと考えてもいいようだが、やはり認めがたい点がある。たとえば、[76]の場合は、原因節と二つの結果節とを組み合わせると、何れも論理関係のあるものとみなせよう。

[76'] 就是因为我不赚‘黑心钱’，所以回头客多，大家给面子。

[76"] 就是因为我不赚‘黑心钱’，所以我的生意不错。

[76'] [76"] の何れも原因節と直接結び付けられるため、原因節によって引き起こされた結果だと認められるだろう。

日本語では、“Q₁←P→Q₂”は“P₁→Q←P₂”と同じく、複文レベルのものとして成り立たず、複文レベルを越え、文の接続関係として訳さなければならない。これは、訳者の訳し方とは関係なく、日本語の構文上のルールに従った結果だと言える。

7.3 構文モデルにおける日中両言語の異同

ここまでは、因果関係を表す複文における日中両言語の構文モデルについて述べてきた。分析にあたって、構造上の特徴だけではなく、文を構成していく接続表現の機能との関連性も視野に入れて検討を行った。また、原因節における接続表現の機能領域についてもところどころ言及した。両言語の構造モデルに関する検討によって、両者の相違点と類似点も浮き彫りにされた。以下、7.1と7.2で得られた結果に基づき、因果関係を表す複文の構文モデルにおける両言語の特徴をまとめて、表によって示す。

7.3.1 「順行型」構文モデルにおける日中両言語の異同

順行型では、両言語の構造上の対応性が極めて高い。つまり、日本語にある構文モデル

は、中国語にもそれと対応できる構文モデルが見られる。ただし、文を構成していく場合、異なった制約を受けることが観察される。たとえば、日本語では、複数の節を羅列して原因節を構成する場合、原因を表す接続表現の機能を考慮し、原因節を明示的に示す機能を持たないものから明示的に示す機能を持つものへと構成していくのが特徴である。これに対して中国語では、原因を表す接続表現が使用される場合、接続表現の位置や統一性を考慮しながら原因節を構成していくのが特徴である。構造上は両言語とも類似点が多いが、文の構成の仕方という点では、両言語の相違が見られる。ここでは、「順行型」構文モデルにおける両言語の類似点と相違点を明瞭に示すため、7.1 と 7.2 で得られた分析結果に基づき、モデル毎に、それぞれどのような特徴を持つのかについてまとめ、【表 41】に示しておく。

【表41】 順行型構文モデルに関する日中両言語の分析結果対照

分類	形式	言語	部の構造		階層構造	接続表現の有無	接続表現			接続表現の位置	接続表現使用の制約	原因節の度合いによる制約	因果関係の度合い		代表的な表現形式	備考														
			原因節の数	各節の順序			接続表現の数	接続表現の種類	原因節の位置				原因節の強弱と順序	原因節の強弱と順序																
順行型	P→Q	日本語	ひとつ	原→結	単層	有	ひとつ	原因を表す接続表現	原因節尾	-	-	-	-	①	「Pから→Q」、「Pで→Q」、「Pため→Q」、「Pで→Q」	典型的な構文モデル。														
																	ひとつ	原→結	単層	有	ひとつorふたつ	原因・結果を表す接続表現	原因節頭	-	-	-	-	②	“因为P→Q”、“因为P→所以Q”	典型的な構文モデル。
	複数	原→結	単層	有	複数	原因を表す接続表現	各原因節尾	制約有	-	-	-	④	「P1し、P2から→Q」、「P1し、P2で→Q」、「P1で、P2から→Q」、「P1で、P2で→Q」	原因節の付帯も、結果節と同一表現階層にある。																
	P1、P2、P3、……→Q	日本語	ひとつ	原→結	単層	有	複数	原因を表す接続表現	各原因節頭	同一接続表現使用	-	-	-	⑤	“因为P1、P2、……→Q” “由于P1、P2、……→Q”	原因節の並列的な意味合いを保つため、各節に原因を表す接続表現が使用される場合、同じものでなければならぬ。 “G1P1、G2P2”のように、異なる「G」による構文は許されないと考えられる。														
																	複数	原→結	単層	有	ひとつ	原因を表す接続表現	原因節①頭	接続表現の位置は文頭	-	-	⑥	“因为P1、P2、……→Q”	接続表現は原因節①に置かなければならぬ。第2期に接続表現がないため、原因節①に置かれる原因を表す接続表現の働きは第2期まで関係し、“G(P1、P2)……”のように理解しななければならない。	
	P1、P2、P3、……→Q	中国語	ひとつ	原→結	重層	無	-	-	-	-	-	-	-	⑦	“P1、P2、……→Q”	各原因節と結果節との間の論理関係は内容によって読み取れる。														
																	複数	原→結	重層	有	複数	原因を表す接続表現	各原因節尾	-	-	⑧	「(P1で/り→Q) = P2から/ので→Q」 「(P1から/ので→Q) = P2で/ず→Q」	P1とQ1は同一階層に存在していないが、P1の存在は、間接的にQ2に影響を及ぼすため、Q2という結果の発生はP1とQ1によるものとも言える。		
	(P1→Q) = P2→Q	日本語	ひとつ	原→結	重層	有	複数	原因・結果を表す接続表現	原因節①頭 結果節②頭	原因を表す接続表現は文頭のみ Q1には必ず結果を表す接続表現が必要	-	-	-	⑨	“(因为P1→Q) = P2→Q”	文頭に立つ原因を表す接続表現は、“P1、P2、……→Q”型の働きとは異なっており、先頭の原因節までしか関わっていない。 「Q2」の発生は「間接原因+直接原因」によるものだと考える。 「Q2」には接続表現が置かれる。														
																	複数	原→結	重層	有	複数	結果を表す接続表現	結果節①頭 結果節②頭	Q1には結果を表す接続表現のみならず、Q2には必ず結果を表す接続表現が必要	⑩	“(P1→所以Q) = P2→Q”	「Q1」には結果を表す接続表現が置かれていない。中間階層特有の構文である。 文頭の原因を表す接続表現は省略されている。 「Q2」には接続表現が置かれる。			
(P1→Q) = P2→Q	中国語	ひとつ	原→結	重層	有	複数	原因・結果を表す接続表現	原因節①頭 結果節②頭	原因を表す接続表現は文頭のみ Q1には必ず結果を表す接続表現が必要	-	-	-	⑪	“(因为P1→所以Q) = P2→Q”	文頭に原因を表す接続表現が置かれ、「Q1」には結果を表す接続表現が置かれる。 すべての節に接続表現が配置される。															
																ひとつ	原→結	重層	有	ひとつ	結果を表す接続表現	結果節②頭	Q1には必ず結果を表す接続表現が必要	⑫	“(P1→Q) = P2→Q”	「Q2」には接続表現が置かれる。これは省略できない。				

7.3.2 「逆行型」構文モデルにおける日中両言語の異同

逆行型では、「順行型」と同様に相違点および類似点も見られるが、「順行型」より複雑になるところがある。構造について言えば、日本語では複文のフレームを越えなければ成り立たないものでも、中国語では、複文のフレームを越えなくても成立できる場合がある。これは中国語の複文の構成の自由度が高いことが考えられる。両言語は、文を構成していく場合、「順行型」と同じく、異なる制約を受けることがあるが、接続表現の機能については、共通点が見られる。以下、両言語の構文特徴に関する分析結果を【表 42】によって示す。

7.3.3 「変形型」構文モデルにおける日中両言語の異同

「変形型」という構文モデルは、中国語では、複文として成立するが、日本語の因果関係を表す複文には見られない。したがって、中国語の「変形型」構文モデルを日本語で表現しようとするれば、やはり、複文のフレームを越え、文の接続関係として表現するしかない。「変形型」が成り立つということから考えれば、中国語は接続表現を使用するか、または省略するかといった自由度が高いだけでなく、文を構成する際の自由度も高いと言える。以下、中国語の「変形型」の構文特徴とそれに対応する日本語の構文特徴をまとめて表示する。

【表43】変形型構文モデルにおける日中両言語の対照

	中国語		日本語	
	形式	構文の特徴	対応形式	構文の特徴
変形型①	$P_1 \rightarrow Q \leftarrow P_2$	<p>①三つの節によって構成され、前と後ろに位置する節は、原因節であり、中間に位置する節は結果節である。「Q」は前の原因節と結びつく結果節であり、後ろの原因節と結びつく結果節でもある。</p> <p>②中国語は接続表現に拘らず、語順と「,」によって文を展開していく場合が多いので、複文のサイズを拡大したり、収束したりするのに一定の自由がある。</p> <p>③複文レベルの“$P_1 \leftarrow Q \rightarrow P_2$”型を、文の接続関係である“$P_1 \leftarrow Q \rightarrow P_2$”型に変えてもよいが、相互の働きかけが違ってくる。</p>	$P_1 \rightarrow Q \leftarrow P_2$ など	<p>①日本語は形態を重視し、構文上は様々な制約を受けやすいため、“$P_1 \rightarrow Q \leftarrow P_2$”型は複文レベルのものとして成り立たず、文の接続関係でなければならない。</p> <p>②翻訳上は、“$P_1 \rightarrow Q \leftarrow P_2$”または“$P_1 \rightarrow Q \leftarrow P_2$”のように、文の接続関係であるものに訳される。</p>
変形型②	$Q_1 \rightarrow P \leftarrow Q_2$	<p>①「P」は前の結果節と結びつく原因節であり、後ろの結果節と結びつく原因節でもある。</p> <p>②「Q1」が生じた原因・理由を「P」によって補足し説明され、または「P」によって分析判断され、“$Q_1 \rightarrow P$”という「逆行型」因果関係構文が構成されている。さらに、「P」によって「Q2」という結果が導かれ、“$P \rightarrow Q_2$”という「順行型」因果関係構文が構成されている。</p>	$Q_1 \rightarrow P \leftarrow Q_2$ など	<p>①日本語は、“$Q_1 \leftarrow P \rightarrow Q_2$”型は複文レベルのものとして成り立たず、複文レベルを越え、文の接続関係として訳さなければならない。</p> <p>②翻訳上はこれは、“$Q_1 \rightarrow P \leftarrow Q_2$”型に訳される可能性もある。何れにせよ、複文レベルの因果関係として成り立たない。これは、訳し方と関係なく、日本語の構文上のルールに従う結果だと言える。</p>

注

第7章

- 1) 日本語の構文モデルに関する分類は、多くのデータを観察し、因果複文がどのように構成されていくかといった展開方法に着目し、分類したものである。
- 2) 接続助詞「し」は本研究の考察対象範囲に含まれていないが、原因節の構成が複雑になるにつれて、「し」との関わりも避けられなくなり、あえて「し」を使用する文も取り上げた。なお、「し」を含む用例を取り上げる際、「し」節のみを含む文ではなく、「ので」や「から」といった本研究の考察対象であるものも含まれる文でなければならない。
- 3) 「弱 ⇒ 弱」は原因節が複数のもので構成される場合に、それぞれの節に因果関係を明示する機能を持たない接続表現が使用されていることを表し、それらによって示された因果関係の度合いを「弱」とみなす。
- 4) 「弱 ⇒ 強」は原因節が複数のもので構成されており、原因節①には因果関係を明示しない接続表現が使用され、原因節②には因果関係を明示する接続表現が使用されていることを表す。因果関係を明示しない接続表現によって示された因果関係の度合いを「弱」、因果関係を明示する接続表現によって示された因果関係の度合いを「強」とみなす。
- 5) ここでいう「文レベル」の意味は、節と節の因果関係ではなく、前件と後件はそれぞれ文になっている。つまり、文と文の因果関係ということである。
- 6) ここでいう「節レベル」の意味は、節と節の因果関係ということである。
- 7) 市川 (1978:115) 参照。
- 8) 中国語の構文モデルに関する分類は、データ上の傾向と先行研究に基づき行った。先行研究は主に刘楚群(2002) (“因为”和“由于”差异初探)を参照した。刘(2002)では、原因節の位置によって、因果関係を表す複文の構造を4種類に分けている。

- ① “由因推果” (X→Y)
- ② “由果溯因” (Y←X)
- ③ “多因推果” (X1, X2, X3……→Y)
- ④ “一果多因” (Y←X1, X2, X3……)

⁹⁾ 修辞法の一つである。構造が似通い、意味が密接に関連し、語気がそろった三つ以上の節または文を並列する修辞法。

¹⁰⁾ 邢福义(1997:341)参照。